ゆとりーとライン上志段味バス停→勝手塚古墳→西大久手古墳・東大久手古墳→志段味大塚古墳→白鳥塚古墳→東谷山白鳥古墳

ゆとりーとライン上志段味バス停から県道を渡り、河岸段丘の緩やかな坂を上ると、左手に木々に覆われたこんもりとした盛土前に出ます。ここが｢**勝手塚古墳**｣です。石段を上り正面に立つと、見上げた先に勝手塚神社の本殿が鎮座しています。この古墳の北側には、水濠と周堤が一部残っています。特に、周堤は、愛知県下で唯一高まりの残っている古墳です。古墳全体を見渡せませんが、帆立貝に似た｢帆立貝式古墳｣です。

勝手塚古墳を後にして、再び河岸段丘を上っていくと、前方に2階建ての新しい建物が見えてきます。｢しだみ古墳群ミュージアム｣です。2019年４月にオープンしました。しだみ古墳群での出土物を展示する資料室や埴輪や勾玉づくりが体験できる施設が整備されています。

｢しだみ古墳群ミュージアム｣を出て、さらに1段高い河岸段丘の階段を上ると、一面芝生に覆われた広場に出ます。複数の古墳が並んでいます。もっとも西に位置する古墳が、｢**西大久手古墳**｣です。西側の前方部から見ますと、前方部が短い｢帆立貝式古墳｣が分かります。また、後円部の2段目が削られていることも分かります。右手中央のくびれ部からは巫女形埴輪や鶏形埴輪が、手前の前方部中央からは、馬形埴輪が出土しています。今立っているところは、かつて水が張られた周濠であり、目をとじると東谷山を背景として、水に浮かぶ古墳が浮かんできます。

次は、｢**東大久手古墳**｣です。この古墳も帆立貝式古墳ですが、今の姿は前方部が削られ、後円部の2段目もほんの一部を除いて削られています。この古墳からは、円筒埴輪や須恵器が出土しています。

東大久手古墳から歩道を進み、緩く右にカーブすると、正面に円錐台の古墳が見えてきます。これがこの芝生に覆われた広場でのシンボル的な古墳である｢**志段味大塚古墳**｣です。この古墳も前方後円墳の前方部が短い帆立貝式古墳です。前方部1段、後円部2段で、高さは約7mであり、1500年余前の姿を見せてくれています。この古墳の頂には、２つの埋葬施設が埋められていました。発掘してみると、中から甲冑・太刀・鏡・馬具・盾などが出てきました。また、古墳の頂、2段目や前方部には、円筒埴輪や蓋形埴輪などが立っていました。今見る古墳もその姿を再現して、見せてくれています。鶏形埴輪や水鳥形埴輪も出土しています。

芝生の広場を後に、住宅街の道を東へ、10分ほど進むと道が途切れます。足を右に向けると、再び木々に覆われた盛土前に出ます。しだみ古墳群の｢祖神｣的存在の古墳である｢**白鳥塚古墳**｣です。全長115m、後円部高さ15m余の愛知県で第3位の前方後円墳です。大きさもさることながら、古墳のかたち・装飾・しきたりなどをみると、時の権力を握っていたヤマト王権との強いつながりが想像できます。４世紀前半につくられたとみられています。古墳の斜面には、敷かれた角礫や円礫の上に石英の小礫が撒かれていたようで、さながら真っ白な古墳に見えたことでしょう。｢白鳥塚｣の名前の由来とも言われています。

｢白鳥塚古墳｣の雄姿を眺め終えたら、車に注意して、道を渡ります。舗装されていない細い道を通り、小さな広場に出ます。そこには雪国で作られる｢かまくら｣のような形をした古墳があります。｢**東谷山白鳥古墳**｣です。６世紀末から7世紀初めに造られた、多数の小規模な古墳が密集する｢群衆墳｣の1つです。さいわい石室がほぼ完全な状態で残っています。その石室からは、大刀・刀子・馬具・土師器・須恵器が出土しています。石室の開口部から中を見ることができ、玄室・羨道などを確認できます。古墳時代も後期あるいは終末期になると、前方後円墳のような１人のための古墳から、家族などの複数の人のための古墳へと変わってきたことが分かります。

以上